

ほ場整備事業に伴う遺跡発掘調査成果

雄物川郷土資料館令和5年度第2回特別展

発掘された横手 ～足元に眠る地域の宝～展示のみどころ

藤原 正大（横手市教育委員会）

I はじめに

1. 今回の展示の趣旨

横手市は、県内で最も遺跡が集中しており、現在までで652箇所の遺跡が発見されています。これほどまでに遺跡が集中するのは、各時代を通じて、土地が豊かで住みやすいことが背景にあるのではないのでしょうか。これらの遺跡は、先人たちの遺した貴重な生活の営みの痕跡であり、最も身近にある、まさに「地域の宝」と言える存在です。

近年、横手市教育委員会では、ほ場整備事業に伴う遺跡の発掘調査を実施しており、全国的にも注目されるような発見が相次ぎました。今回の展示は、特に注目される発掘調査成果を皆様へ広く公開し、「地域の宝」についてより知っていただくことを目的としました。

2. 横手市内の発掘調査（第1図）

横手市内では農業の担い手への農地の集積・集約化を進めるとともに、米や野菜などを作付けしやすくするため、ほ場整備事業が継続して実施されています。

横手市教育委員会では、市内で600箇所以上確認されている遺跡を守り、後世に伝えていくため、ほ場整備事業に先立って「試掘調査」を実施し、遺跡の正確な範囲や内容を確認しています。また、工事によって遺跡が消滅してしまう範囲については「本発掘調査」を実施し、遺跡の価値を広く市民の皆様や研究機関に知っていただくため、「発掘調査報告書」を刊行しています。

横手市教育委員会では、平成17年（2005）の8市町村の合併以降、ほ場整備事業に伴って37遺跡、延べ77,000㎡（およそ東京ドーム1.6個分）もの発掘調査を実施してきました。以下では、現在雄物川資料館で展示している縄文時代から鎌倉時代（中世）までの4遺跡の調査成果のみどころについて解説していきます。

II 各時代の遺跡のみどころ

1. 縄文時代 神谷地遺跡（横手市雄物川町薄井字神谷地）

縄文人 死者を吊う 墓つくる

遺跡の立地と年代

平成24～25年（2012～2013）に発掘調査を行った神谷地遺跡は、横手市立横手明峰中学校の南

東およそ 1.4km に位置します。遺跡の西およそ 2km には雄物川が北流し、雄物川より 2 段高い河岸段丘（比高差およそ 2m）の上に遺跡が立地しています。発掘調査の結果、縄文時代中期（およそ 5,000 年前）と晩期（およそ 3,500 年前）の集落跡など、複数の時代の遺構や遺物が発見されました。

大規模なムラのあと

発掘調査では、縄文時代中期の竪穴建物跡がおよそ 70 軒確認され、横手盆地の中でも大規模な集落が色なまれていたことが分かりました。竪穴建物跡の炉の中からは、サケ・コイ・イノシシ・サケの焼骨が出土し、この一帯で内水面漁撈や狩猟採集を営んでいたことが分かりました。

無数の墓(第 2 図)

縄文時代晩期は墓域が広がっており、地面を掘りくぼめて遺体を納める土坑墓や、遺体を縄文土器に納める土器棺墓などがおよそ 100 基確認されました。土坑墓内からは、植物の繊維にベンガラを塗った漆紐が出土したものや、底面にベンガラが塗られたもの、祭祀具の石剣が出土したものなどがあります。以上の事例から、神谷地遺跡に暮らした縄文人が、死者を手厚く葬っていたことが分かりました。

2.古墳時代 一本杉遺跡(横手市平鹿町下吉田字一本杉堂ノ後)

古墳人 横手の大地に 根を下ろす

遺跡の立地と年代

平成 29 年（2017）に発掘調査を行った一本杉遺跡は、横手市役所平鹿地域局から北西 4.5km に位置します。遺跡の周辺には中小の雄物川支流の河川が北流しており、遺跡はこのような河川が浸食・氾濫を繰り返すことで形成した微高地の上に立地しています。発掘調査の結果、古墳時代中期（およそ 1,500 年前）の集落跡が発見されました。

明確になった古墳時代の集落(第 3 図)

遺跡からは竪穴建物跡が 5 軒発見されました。建物は、一番大きいもので一辺 10m を超え、床面積は 100 m²以上になる巨大なものです。住居の構造や、生活の中で使用された土師器（素焼きの土器）は、北陸地方と共通する点が多く、集落の形成には北陸地方の影響があったと考えられています。

秋田県内では、これまで古墳時代の竪穴建物跡や遺物がまばらに見ついていたものの、集落全体が調査された例がなく、不明確な時代でした。しかし、一本杉遺跡が調査されたことで、古墳時代の生活や地域間の交流の様子が明らかになりました。

3.平安時代 大清水遺跡群(横手市平鹿町浅舞字大清水)

平安の 漆工営む ムラの跡

遺跡の立地と年代

令和 3 年（2021）に発掘調査を行った大清水遺跡群は、横手市役所平鹿地域局から北西およそ 2.5km に位置します。遺跡の東およそ 2km には、雄物川支流の大宮川が北流しており、遺跡はこの河川が形成した河岸段丘上に立地しています。発掘調査の結果、平安時代前半（およそ 1,200 年前）の集落跡などが発見されました。

平安時代の漆工房？(第 4 図)

遺跡からは竪穴建物跡 4 軒や掘立柱建物跡 10 棟が発見され、場所を変えながらおよそ 100 年

にわたって集落が営まれたことが分かりました。

ここで注目されるのは、竪穴建物跡の中や周辺の土坑から、漆が付着した土器が一定量出土したことです。漆は、採取したものをそのまま使うことは少なく、精製して工芸品などに使用し、精製の度合いによって2種類の漆が存在します。ひとつめが、漆を漉して木屑やゴミを取り除いた「生漆（きうるし）」です。ふたつめが「生漆」を攪拌（かくはん）して漆の成分を均質にする「なやし」や太陽のもとで水分を飛ばす「くろめ」といった工程を経て精製する「透漆（すきうるし）」です。

大清水遺跡群の漆は、生漆と透漆の両方がみられますが、生漆は素焼きでやわらかい土師器の、透漆は硬質の焼き物である須恵器の内面に付着し、器の材質によって異なる精製工程の漆を分けていました。

このことから、大清水遺跡群で生活した平安時代の人々は、漆を採取して漉した「生漆」を土師器に貯蔵し、この「生漆」をさらに精製した「透漆」を須恵器に貯蔵するというルールがあったのではないのでしょうか。このことから、大清水遺跡群の中で漆の生産・加工が行われていた可能性を考えることができます。

4.鎌倉時代 堀田 I 遺跡(横手市平鹿町樽見内字堀田)

鎌倉御家人参上！ 秋田で初の 烏帽子が出土

遺跡の立地と年代

令和4年(2022)に発掘調査を行った堀田 I 遺跡は、横手市役所平鹿地域局から西北西およそ2.7kmに位置します。発掘調査の結果、鎌倉時代(およそ800年前)の集落跡などが発見されました。

墓から見つかった秋田県で初めての烏帽子

遺跡からは井戸や貿易によってもたらされた中国製の陶磁器(青磁)のほか、土坑墓から国内でおおよそ30しか例のない、烏帽子とみられる布製品が出土しました。

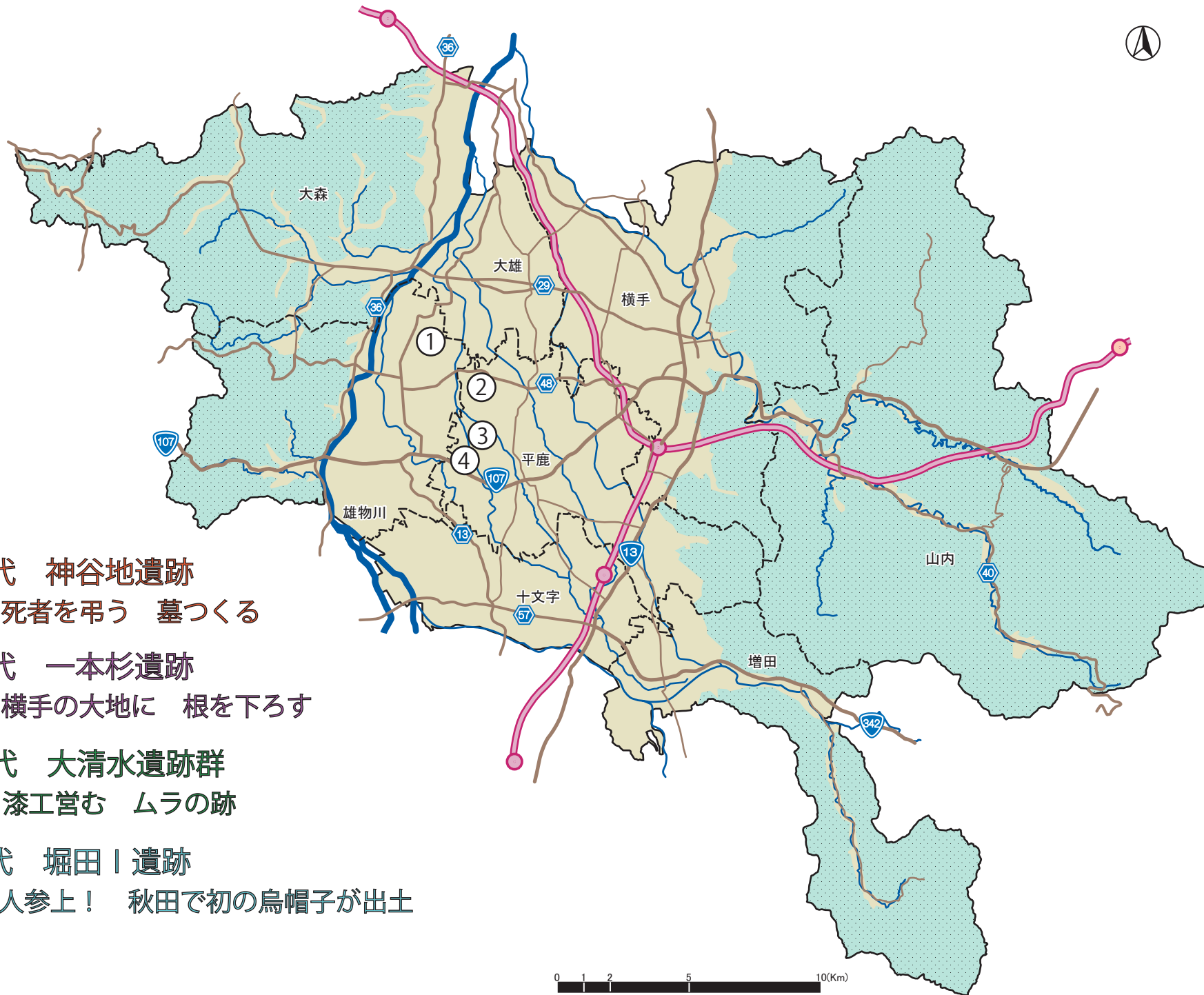
土坑墓は真北を向き、底面には上腕骨や脛骨の痕跡が残っていました。烏帽子は撚りをかけた絹糸を編むことで作られ、漆が塗られていました。科学的な分析の結果、この烏帽子は1,163～1,221年の間に製作されたことが判明しました。これは、昨年大河ドラマの主人公、北条義時の一生にほぼ相当します。

今回出土した烏帽子からわかること

烏帽子は古来からの男性の装束として知られており、鎌倉時代には大きく分けて立烏帽子(たちえぼし)と折烏帽子(おりえぼし)の2種類がありました。立烏帽子は鎌倉幕府の将軍や執権(北条氏一門)身分の高い人物が身に着けたのに対して、折烏帽子は鎌倉幕府に従う御家人や地頭などが身に着けました。

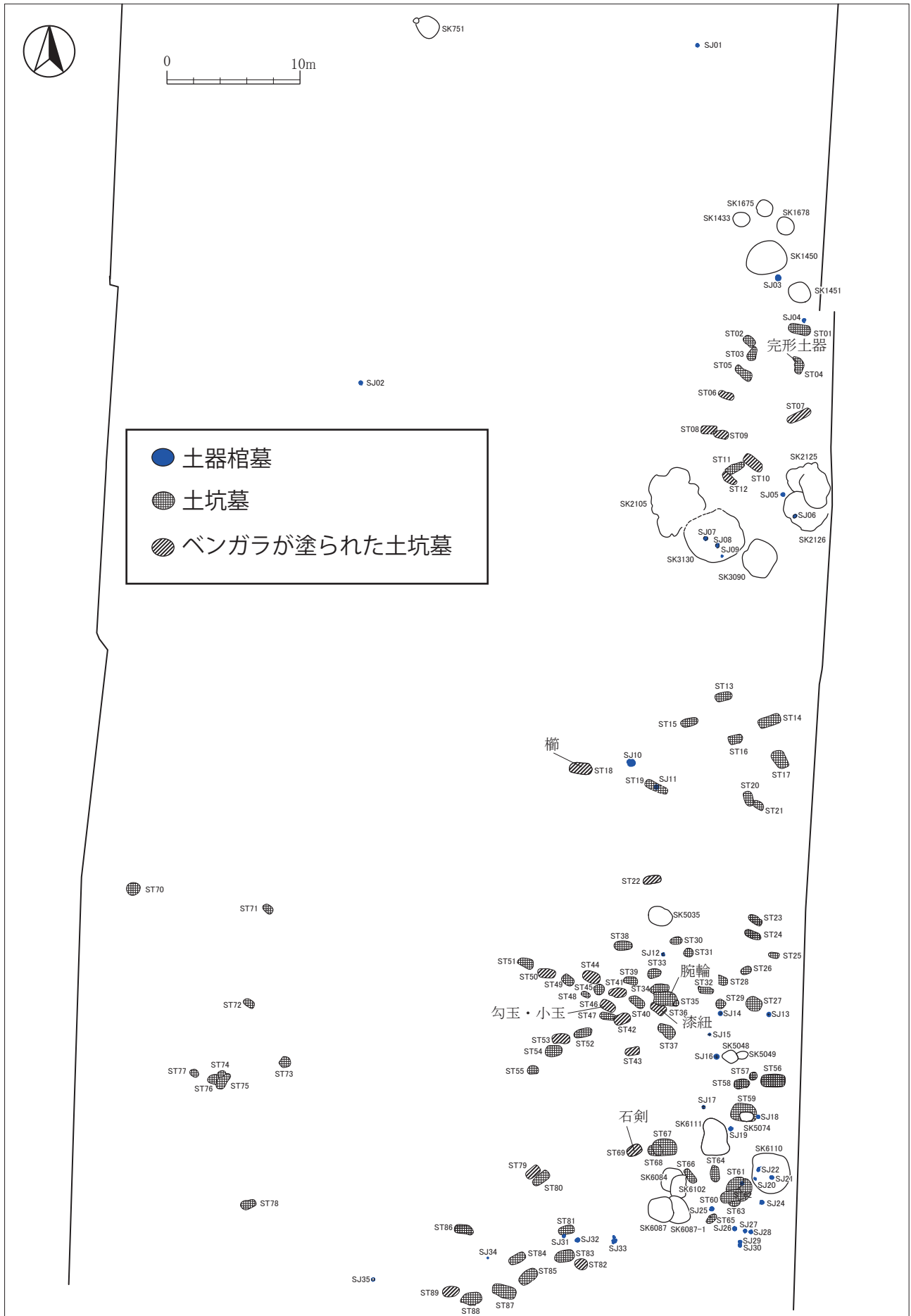
今回出土した烏帽子は、出土した状態から折烏帽子と考えられます。烏帽子は一部が地中で分解されていましたが、「縁帯」と呼ばれる額が当たる部分が明瞭に残っていました。これは、布を何回か折り返したことで厚みがあり、地中で分解されにくかったためと考えられます。

今回発見された土坑墓に葬られたのは、折烏帽子が見つかったことから、鎌倉時代の横手市(平鹿郡)一帯でも有力な、御家人や地頭クラスの人物であると考えられます。

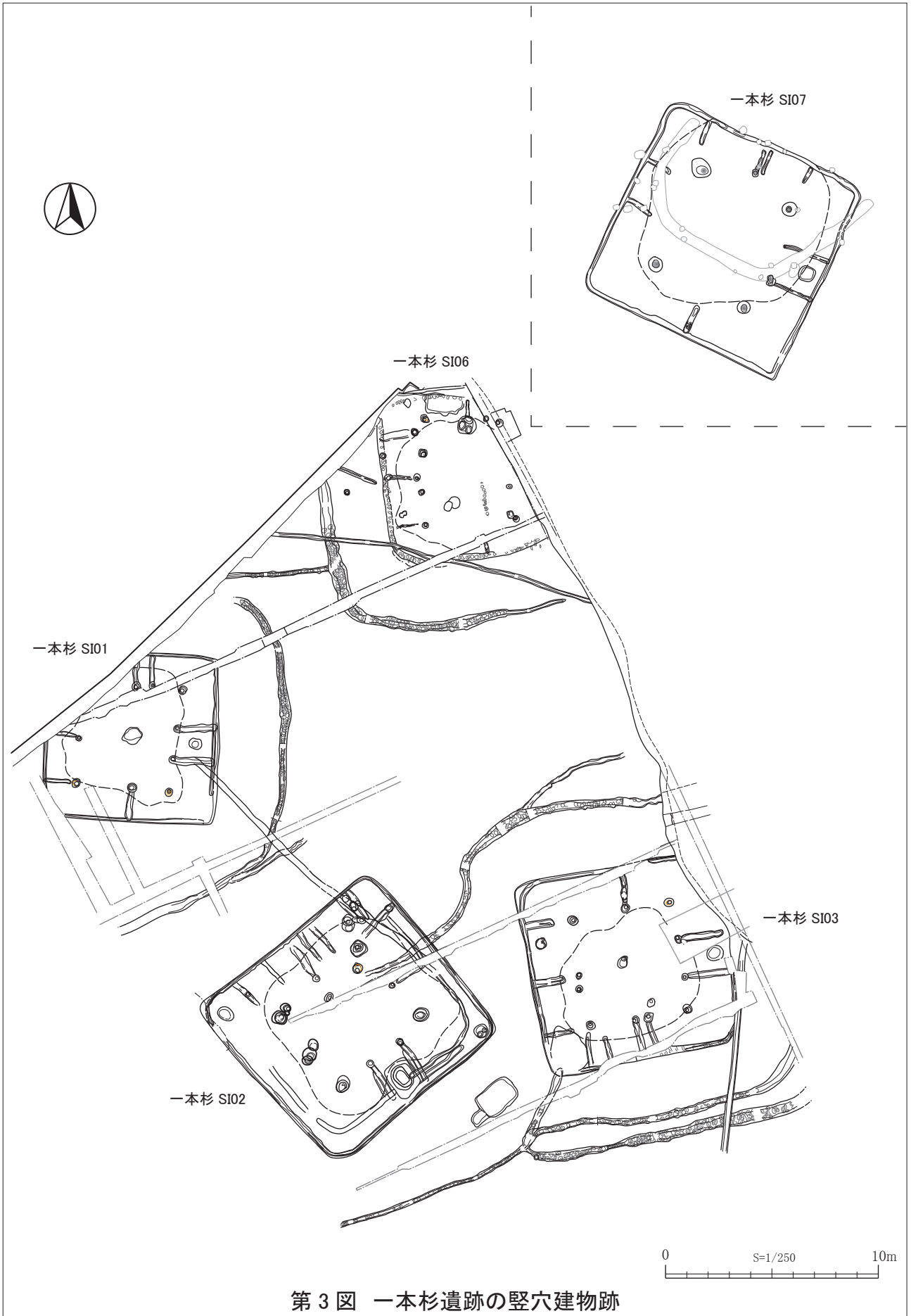


- ① 縄文時代 神谷地遺跡
縄文人 死者を弔う 墓つくる
- ② 古墳時代 一本杉遺跡
古墳人 横手の大地に 根を下ろす
- ③ 平安時代 大清水遺跡群
平安の 漆工営む ムラの跡
- ④ 鎌倉時代 堀田Ⅰ遺跡
鎌倉御家人参上！ 秋田で初の烏帽子が出土

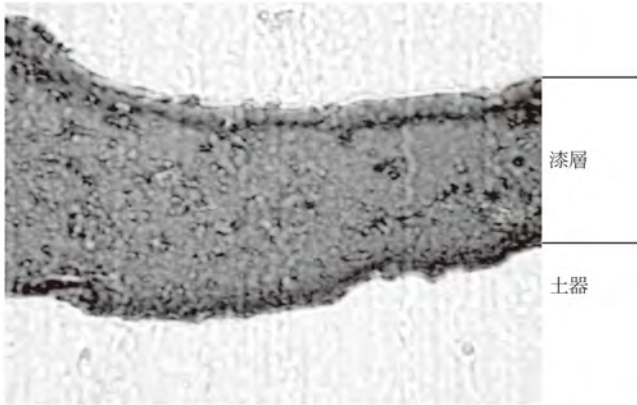
第1図 今回取り上げた遺跡



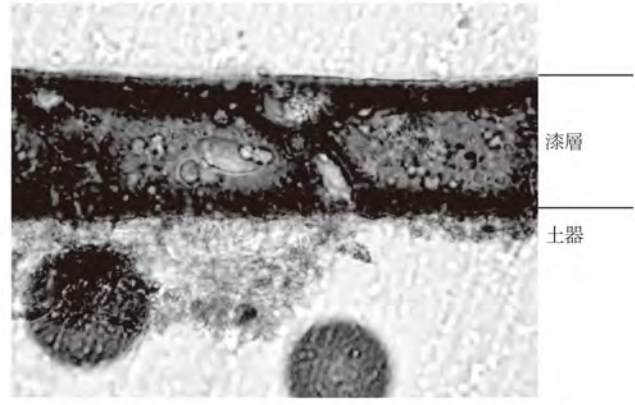
第2図 神谷地遺跡 縄文時代晩期の墓



第3図 一本杉遺跡の竪穴建物跡

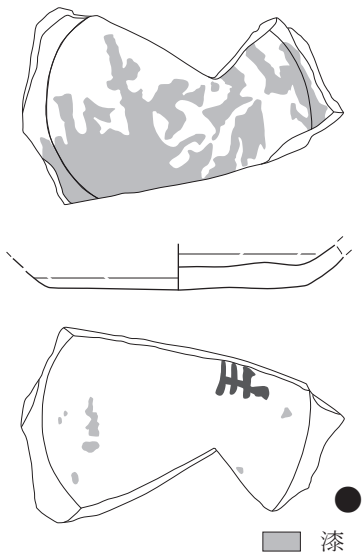


須恵器に付着した漆の顕微鏡写真



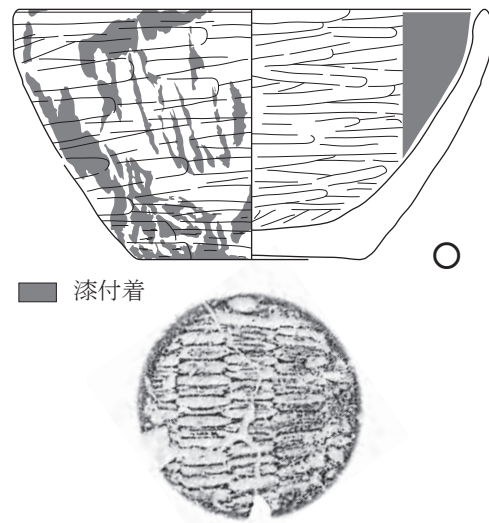
土師器に付着した漆の顕微鏡写真

須恵器 杯



SK232-3 (確認面・7層)

土師器 鉢



SKI120-21 (2層)

第4図 大清水遺跡群 漆の付着した土器